

憲法・47教育基本法・子どもの権利条約をまもり、生かそう！

No.40

子どもと教育・文化 連の会

会報

発行日 2019年 4月30日

発行責任者 共同代表

姉崎洋一 井上大樹

加藤多一 河野和枝

事務局 〒060-0042

札幌市中央区大通西12丁目

北海道高等学校教職員センター
3階

TEL 090-9523-4396

FAX 011-663-0457

メールアドレス:

kodomotokyoku@gmail.com

ホームページ:

kodomotokyoku.jimdo.com

世取山洋介「講演会」のご案内

「子どもの権利条約を考える part3」 「国連子どもの権利委員会が日本政府に求めたもの」 ～国連第4・5回最終所見から～

2月1日、国連子どもの権利委員会は、日本政府に対して最終所見を発表しました。

この最終所見では、

- 「社会の競争的な性格により子ども時代と発達が悪化することがないよう措置をとること」を求めているほか、
- 体罰の全面禁止
- 家族手当・子ども手当の制度の強化
- 極度に競争的な制度を含む学校環境からの子どもの開放
- 「授業料無償化」の朝鮮人学校への拡大
- 待機児童の減少・保育の質の向上など多岐にわたり勧告・要請しています。

これらの内容について、深く学ぶことは、とても重要なことだと思います。

今回の講演会は、同封チラシにあります。子育て教育にかかわる11団体の共催事業となっています。多くの個人・団体が協力し合うことがとても大切な時でもあります。

是非、会員のみなさんに参加していただけますようお願いいたします。また、お知り合いの方々にお誘いいただければ幸いです。チラシは、HPにも掲載していますので、カクサンしていただく際に活用ください。

と き：5月26日（日）受付 13:00～ 講演・交流 13:20～16:00

ところ：「かでる2・7」520研修室

事務局より

1. 「会報 No40」を発行いたします。

【会報記事】

- ①巻頭言 ご挨拶 井上大樹・姉崎洋一（共同代表）
 - ②学びの基礎診断、大学入学共通テスト、英語の四技能、e-Portfolio ってご存じですか？
「出口」から変えられようとしている高校教育
尾張 聡（道高教組 中央執行委員長） p4
 - ③定時制の存在意義と高校入試改革
土岐剛史（道高教組定通部 部長）
 - ④「さっぽろ 子ども若者白書 2020」づくりが始まりました
～参加&力添えをお寄せいただけませんか～
柳 憲一（「さっぽろ 子ども若者白書 2020」編集長）
 - ⑤「いいね」でつながる、力合わせの運動づくりを…
内藤 修司（道教組副委員長・宗谷教組副委員長）
- ④研究会などのお知らせ

2. 【事務局からのお願い】

- ① 今年度も会費の納入をお願いいたします。およそ1年間程度会費が未納な方は是非納入ください。
また、しばらくお休みされている方もこの機会に新たにご加入ください。
年会費1口単位1000円です。（何口でも結構です）
最終会費納入年を宛名シール最下段の数字で示してあります。
数字のない方は2010年以降会費納入がありません。
可能な範囲で会費納入をお願いします。
- ② ブックレット「子どもの権利条約を考える part2」について
1) 昨年会報 No38とともに、同封いたしましたブックレットについての読後感想をお寄せください。字数は、特に制限はありません。
2) 残部が200冊弱あります。皆様の周りの方々に声掛けをお願いします。
1冊300円です。送料自己負担です。（送料は、冊数により100円から200円程度です）
- ③ 会報原稿（寄稿文など）をお寄せください。
- ④ メールアドレスお知らせください。住所変更がありましたらご連絡ください。
空メールでも結構です。ただし氏名がわかるようにお願いします。

【「第4・5回最終所見『翻訳と解説』パンフレット」 1冊350円で販売しています】

「子どもの権利条約市民・NGOの会」は、国連子どもの権利委員会からの最終所見について、「翻訳と解説」冊子を作成し普及しています。「道民の会」事務局では、このほど80冊取り寄せて、希望される方に販売しています。1冊350円です。（送料負担分も含めて）希望される方は、事務局にメールで連絡ください。

【巻頭言】

本会共同代表就任のご挨拶

「民主的学園」と評された大学に勤める者の責務として

井上大樹（共同代表・札幌学院大学）

このたび、本会の共同代表の一人に名前を連ねさせていただきます。これまで私は、札幌遠友塾自主夜間中学、さっぽろ子育てネットワークを皮切りに、地域のあらゆる教育・子育ての現場、特に困難を抱えている人（義務教育を十分に受けられなかった成人、子育て困難にさいなまれる親 など）を支え、エンパワーする実践にかかわりつつ、北海道の地に根差した教育学研究を志向しています。また民間教育運動では、主に北海道民間教育研究団体連絡協議会（道民教）で合同研究集会「子どもの声をきく」特設分科会世話人を皮切りに研究委員、研究副委員長、事務局長と約 20 年にわたり、全道の子どもの権利を尊重した多くの教育実践から学ぶ機会を得ました。生まれ育った札幌の地で 30 代半ばまで「フリーランス」で実践と運動のただ中に身を置き、在野の教育研究者を標榜している時期もありました。縁あって、北海道文教大学（4 年）、札幌学院大学と専任教員の職を得、現在に至ります。実は、大学の多忙化に巻き込まれる中、これらの取り組みからいったん全て手を引くべく、この 1 年段取りをしていたところでした。

さて、私がいる研究室は札幌学院大学の A 館 A505 室です。ここからは石狩平野の景色が一望できるとても眺めのよい研究室です。この部屋は代々、いわゆる教育学プロパーが陣取っており、旧くは鈴木秀一先生（北海道大学を早

期退職され、本学赴任時に北海道自由が丘学園を創設された）、その後富田充保先生（元・道民教研究委員長、現・相模女子大学教授）、1 年の「空き部屋」を経て私が入るに至ったわけです。本学は大学の理念として「自律」「人権」「共生」「協働」を掲げ、さらに新さっぽろキャンパス整備にあわせ SDGs（持続可能な開発目標）を新たに加えようとしています。本学は戦後すぐの札幌文科専門学院開設以来、民主主義をつくり、守ることを学園づくりから個々の教育・研究に至るまで一貫して追求しました。大学づくりでは「民主的学園」の評価に違わず、今でも教授会、組合と理事会の名実ともに対等な関係は変わりありません。教職課程では実質「教員採用試験予備校」になりがちな教育内容を子どもの権利に根ざした教育実践者への学びになるよう、研究者、実務家（教師、校長経験者）の立場の違いを超え取り組んでいます。

現任校に赴任して 2 年半がすぎ、昨年度から学科も預かる身である私に当会の共同代表のお話をいただいた当初は、10 年いや 20 年早いのではとお断りをするつもりでした。ただ、大学を含む教育現場へのあらゆる統制が厳しくなる一方、学風も追い風になり内外への発言が自由にできる環境にある自分が、一人ひとりの子どもに根ざした学校、地域づくりへの発信を「サポ」することは自分の置かれている立場では許されないのでは、と思い直し微力ながらお引き受

けた次第です。

少々内輪じみた話で恐縮です。今後は通信などを通じ、子ども目線の地域再生を「オール北海道」でどう取り組むのかについて、地方創生の意外な功績やコミュニティ・スクール（学校運営協議会）の問題点と可能性にも触れながら、

子どもやマイノリティの尊厳や権利を擁護する国内外の社会的潮流に対する教育・子ども政策の「逆コース」をはねかえす「道民の会」への飛躍に少しでも貢献できればと考えております。

まずは世取山講演でお会いしましょう。

今後ともよろしく願いいたします。



新学期「再生」の日々を生きる（2019.4.1－4.12）

小中高の教員は、3月から4月は目の回るような多忙な日々だ。大学も似たような環境に置かれている。でも下記は、4度目の勤めなので、少し様相が違うかもしれない。

4月1日（月）

前日まで東京にいた。9条俳句関連の集会、学習会だった、

4月に入って身辺異変。エープリルフールではないが、ちょっとサプライズ。新たな日だ。

大学高等教育機関に勤めて4つ目の仕事（新設こども学科学科長）を短期間することになった。そのための、色々な準備を1年かけてきた。

考えてみれば、

- 1、公立大学（愛知県立大学）、国立大学（埼玉大学、北海道大学）、そして私立大学（札幌大学）と全部を経験することになった。
- 2、また、学部大学（愛知県立大学）、学部+大学院（修士）大学（埼玉大学）、大学院（修士、博士後期）大学+学部大学（北海道大学）、短期大学

姉崎洋一（共同代表・北大名誉教授）

（今回）の全てを経験することにもなった。

- 3、英国（客員研究員、客員教授）、中国（客員教授）、韓国（短期滞在）と外国の大学も経験した。
- 4、教員養成も、保幼小中高、大学教員の「卵」養成を経験し、社会教育主事養成も経験した。今回は、幼児教育教員・保育者養成の仕事だ。
- 5、研究での専門も教育行政・法、社会教育、高等教育を考えてきたが、これから少し幼児教育・保育も学び直す（最初の大学で耳学問はした）ことになる。生涯学習そのもの。よろしくどうぞ！

4月1日（その2）

朝、辞令交付。身分証とバッジ（会社と同じ。僕は、使わないが）もらう。そして、新入生のガイダンスが始まった。副学長（学長が不幸あって代理）と僕が挨拶、後は教員紹介と学生自己紹介。午後はガイダンスで時間を使った。カリキュラム、資格の取り方等々。短大は、懇切丁寧だ。今の学生の学ぶ環境は厳しい。地方私学は特に厳しい。奨学金も多くの学生が、申請する。し

かし、学生は元気で快活、安心した。スポーツ(バドミントン、卓球、サッカー)、音楽(ポップ、ブラス、バンド)、ダンス、こども好きがいて安心もした。まだ地が出てないが、変わり者もいて良い。型にはめないことも大事。こども学科は男女共学。男子学生は圧倒的多数の女子の中にあって黒一点。最初の勤務校の愛知県大「児童教育学科」を思い出した。この学生たちの変化をつぶさに見ることになろう。帰る時間になって雪が降ってきた。研究室の備品は予算が限られるので、家から持ってくるものも多い。今週はガイダンス一色だ。

4月2日(火)

今日も新入生のガイダンス(授業の取り方)が午前、いわゆる初年次教育だが、もう少し大人の扱いが必要と思うが、手取り足取りだ。午後は新教員のための説明会(研究支援、諸手続き、福利厚生、等々)であった。「えっ」と驚くことが多い。福利厚生の補助は、私学のほうが手厚い。研究や諸手続きでは、国公立大学では、「改革」によって「大学の風景」がずいぶん変わったのに、ここは牧歌的なところが多い。やはり、これではいけないだろうというところと、これはゆるくていいなというところがある。そこに、私学の独特のシステムを感じる。長所も短所も。

4月3日(水)

今日も新入生ガイダンス、キャンパス案内を学生にする。早めに出たのに4月の雪で、渋滞でギリギリになった。今日は、新校舎での新設備や学内設備案内が中心だ。女子のパウダールームがあるのも、今風。午後は第1回学科会議、最初が肝心。やることいっぱい。気になるのは

学生の見方、この点で、どういう風に議論するのか、悩ましい見方をする人がいる。

その後は、教員向けの最新機器説明。クタクタだ。帰路研究室に必要なものを求めた。自費でやるしかない。

4月4日(木)

今日は、午前は学生とのアイスブレーキングで、学生と教員との親近感をつくりつつ学生の様子を捉えるプロセス。若手の教員がリードしてくれた。午後は学科会議。新設学科だと歩みながら考え、進めることが多い。慣習の形成もある。大学を経験していない人や思い込みが激しい人にも、大学とは何かの基本を確認しつつ、合意を一つずつ積み重ねていくことが肝心だ。
**p.s.スーラの絵(ポスター)と中国の留学生からいただいた絵(彼の祖父の画家)が復活した。

4月5日(金)

今日は書籍の一部搬入とPC設定。pcは、生協の方に設定お願いしたが、意想外に時間かかってしまった。PCは、ネット環境とプリンタとも繋がった。

4月6日(土)

今日は入学式。都心の真新しい創世スクエアホールが会場。(新入生は、学部生743名、短大38名、大学院1名)吹奏楽団の演奏、学長、理事長の挨拶。学生代表の挨拶と続いた。校歌は森田公一の作曲。(僕は、校歌は苦手、まともに歌えるものがない。)その後、新設学科のスタッフで、茶話会、二次会、三次会。色々な出自の混成部隊だが、よろしく。

4月7日(日)

昨夜は少しほろ酔い気分帰宅。今日は日曜だが、午後に研究室に少し書籍搬入。少しずつ

だ。PCでチェックした資料の印刷等もした。明日から通常授業が本務校と非常勤先で始まる。今回担当分野の一部転換で、研究室には、書庫に眠っていた資料が復活した。自宅と研究室とセカンドハウスの分野を3元体制で行えるか、新たな挑戦だ。

4月8日(月)

やってしまった。荷物の搬入時に、左手を切ってしまった。労災適用という。大したことはないが、思わぬことで半日潰れた。H大でクラスに襲われて労災申請したことがあったが、二度目の体験。

4月9日(火)

午後、HK大学のシラバスを遅れて記入する作業を行った。今年は、H大、HK大、S大と短大で講義。新学期の出だしは、こんなところか。

4月10日(水)

午前にH大の非常勤。今年は勤務校の都合で、時期と曜日を変えた。去年は理系学生が取りにくい時間帯か結局全員文系だった。今年は、必修科目と語学科目にぶつかって、あいにく最少人数。午後は勤務校に戻って学科会議。たくさん議題があった。

4月11日(木)

今日は朝1の講義。HK大、南区の端から北区の端のあいの里まで、車で移動。毎年だが、この時期は道路が混む。ギリギリ間に合って、世話係のA先生に挨拶。150人を上回る受講生なので、調整をしてもらい出来るだけ同時開講のA先生の教室に移ってもらうことに。さて、来週どうなるか？第1講は無事に済んだ。

急いで、勤務校にもどった。午後学長室での会議後、所属学科の学生相手の初講義。なるだけ易しく、かつ水準落とさず、考え書く作業も取り入れ、パワポスライド使い、応答も入れて双交通方式としたが、大多数は良し。しかし、今日は講義が続いたようで1-2名は1時間経ったら果てた様子。よっしゃ。解放してやるよと早く終わった。そしたら元気がいいこと。今週は違う個性の3大学の学生を相手にした。同じ18-20歳の若者。前任校では院生が主軸で残りは主に学部生相手だったので、本当に若い諸君だ。

4月12日(金)

せっせと書籍を運び込んだが、まだまだ途中。今研究室に運んでいるのは、教育学基本文献と保育幼児教育文献、女性論、憲法等基本文献、貧困・福祉、若者支援関係本などだ。家(自宅+セカンドハウス+書庫)に残すのは、社会教育・生涯学習、高等教育、教育学実践諸文献、諸科学本、社会諸分野・運動、ファイル資料、講座本等になりそうだ。金曜の夕方は、研究棟からほとんど人が居なくなる。ちょっとカルチャーショック。研究棟と図書館はまだチラホラ灯が点いている。学生は新歓行事か賑やかだ。

＊＊

以上、新学期の風景を記した。教育の仕事は、老体には、こたえるが、新鮮さはある。ただし、いままでのように研究時間をいかに確保するかが、今後の課題だ。

＊ ＊ ＊ なお、この期間に取り組んだ時事課題はここからは省いた。

学びの基礎診断、大学入学共通テスト、英語の四技能、e-Portfolio ってご存じですか？

「出口」から変えられようとしている高校教育

尾張 聡（道高教組 中央執行委員長）

「道立高校の入学説明会に参加したが、大学進学の実績と対策しか言わない。息子は『夢がない』と入学したい気持ちを失った」。ある受験生の親の言葉です。また、ある現職国家公務員からは、こんな話を聞きました。「高校時代は先生から受験のことしか言われず、自分たちのためだけでなく学校の実績のためだと反発心をもった」。

いわゆる進路指導が大きな比重を占めることは、青年期教育である高校教育にとって避けられないことですが、大学進学率が向上してくる中で、生き方を模索する進路指導でなく、大学進学という「出口」に問題意識が集中する傾向は長く高校教育を覆ってきました。この帰結として受験産業が高校教育に大きな影響力を持っていることは、今に始まったことではありません。特に大学進学については、予備校などが実施する模擬試験の受験が事実上「必須」とされ、その成績すなわち偏差値によって受験する大学を決定することは、私の世代も含めて多くの人を経験してきたことでした。特にセンター試験が始まってからは、「自己採点」の結果を予備校などの受験産業に申告し、予備校のデータにもとづいて最終的に出願する大学を決めることは、もはや常識化していました。

この「常識」が青年の成長発達にゆがみをもたらしていることは政策側も認めるところであり、「グローバル競争を勝ち抜く人材育成」にマイナスであるという問題意識から、いま「常識」

を覆そうとしています。

というと「いいことではないか」と思われるかもしれませんが、そうではありません。一言でいうなら従来は高校教育の中の進路指導、特に大学受験指導にだけ「進入」していた受験産業が、授業内容から生徒指導、学校運営のあり方まで、すなわち教育課程の編成にまで進入あるいは影響力をもつルートがつくられようとしています。あくまで、その根幹に位置づけられる学習指導要領は国が定めるというのが前提です。

そのルートは幾重にもつくられています。まず第1に今年度から高校に新たに導入される「学びの基礎診断」というテストです。安倍政権になって復活した小中学校の全国一斉学力テストによって、「北海道は全国下位」など、都道府県や市町村、あるいは学校間の競争があおられ、授業の「スタンダード化」がすすむなど、教育が大きくゆがめられことはすでに指摘されてきたことですが、「学びの基礎診断」は学力テストの高校版と言えるものです。

しかも、「学びの基礎診断」は、そのほとんどが民間教育産業によって有料で実施され、それを文科省が認定するという仕組みになっています。今年度（2019年度）については、文科省は国語、数学、英語の各教科と、国語・数学・英語の3教科のそれぞれで計25種を認定しました。この中には従来から行われていた漢検や英検も含まれていますが、国語・数学・英語の

3教科をセットで実施できるのは、学研、ベネッセ、リクルートの3社しかなく、しかも学校現場の実態からすればベネッセの「一人勝ち」です。道高教組の調査によれば、19年度から「学びの基礎診断」を実施すると回答した道内28校のうち24校がベネッセの「商品」を導入することにしています。

なぜそれほどの「一人勝ち」になるのか？ベネッセの「商品」は、高校の格差化に合わせた多くのメニューを用意し、その実施、総括、活用までのすべてをサポートする体制を整え、それを売り込む圧倒的な営業力を持ちます。ベネッセの「商品」はすでに多くの高校で導入されていましたが、テストの結果をもとに詳細な分析を持ち込み、学校の教育目標まで「プラン」として提示する営業活動が行われています。

文科省は今回の学習指導要領改訂にあたって、「カリキュラムマネジメント」「PDCAサイクル」を強調し、学習指導要領が描く通りの授業が行われ、各学校や教師個人が「結果」を出しているかを点検し、「改善」を指導する体制をつくろうとしています。そのすべてをベネッセが担うことにもなりかねません。

次にあげなければならないのが、センター試験にかわって2021年から導入される「大学入学共通テスト」です。文科省はその意味を『学力の3要素』を育成・評価することが重要であり、「高等学校教育」と「大学教育」、そして両者を接続する「大学入学者選抜」を一体的に改革し、それぞれの在り方を転換していく必要があります。」としています。

【*学力の3要素とは】

①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、

③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

「大学入学共通テスト」で注目を集めているのが、「記述式問題」の導入と英語の「4技能評価」です。「記述式」については、その客観性や採点の負担などの問題点が指摘されていますが、いま、多くの高校現場で対応を迫られているのが英語の4技能評価です。

【*英語の4技能とは？】

「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能をバランスよく育成することとされています。

問題は「話す」ことの評価です。面接による会話でしか評価できないからです。

文科省は「大学入学者選抜においても、英語4技能を適切に評価する必要があり、共通テストの枠組みにおいて、現に民間事業者等により広く実施され、一定の評価が定着している資格・検定試験を活用し英語4技能評価を推進することが有効と考えられます」として、ここでも民間が実施している検定試験を「大学入学共通テスト」の英語に認定しています。英語に関しては、従来から行われている英検やTOEFLやTOEICが思い浮かびますが、ここでも何とベネッセの「一人勝ち」の様相です。先に紹介した道高教組の調査によれば、「大学入学共通テスト」に対応すべく授業に英語の民間検定を導入しようとしている58校のうち、28校がベネッセが実施するG-TECという英語試験の導入を検討しています。理由は「学びの基礎診断」と同じく、圧倒的なサポート力と営業力に

よるものと思われます。

ここまでで、学校が教育産業に支配される空
恐ろしさを感じられると思いますが、仕掛けは
まだあります。「JAPAN e-Portfolio」という
評価に関するシステムです。指導要録や大学へ
の調査書と連動する仕組みで、HP上では次の
ように説明されています。

高校生が高校生活における学校の授業や行事、
部活動、取得した資格・検定や学校以外での活
動成果を記録し、今後の学び・成果につなげて
いくためのふりかえりと、蓄積した「学びのデ
ータ」を個別大学の出願等に利用することがで
きます。

各大学の入学者選抜において「学力の3要素」
を多面的・総合的に評価するために活用するこ
とを目的に、文部科学省より「JAPAN
e-Portfolio」の運営を許可された当機構が提供
するサービスです。

つまり、高校生が日常的にスマートフォンや
タブレットを使って自分の活動成果や学校の授
業や行事、部活動や取得した資格・検定、学校
以外の活動成果を記録し積み上げていくことで
eポートフォリオとして情報が蓄積され、将来
的にこのデータを大学入試時に利用するという
ことです。そしてここにもベネッセ登場します。
ベネッセホールディングスとソフトバンクの合
弁会社である Classi（クラッシー）が、2019
年度大学入試から高大接続ポータルサイト

「JAPAN e-Portfolio」との連携も計画してい
るとされています。

ここまで述べてきたような状況は、行政によ
ってもあまり説明されず、学校でも進路指導部
や教務部、該当学年などが先行して動き出し、

全体で議論されることなく、「間に合わなくなっ
たら大変だ」という意識で進んでいることが、
調査からも明らかになっています。校内の研修
会を自前でなく、ベネッセを講師に招く例も増
えています。

民間教育産業の参入をすべて「悪」として排
除する議論をするつもりはありませんし、それ
は現実的ではないと思います。しかし、そのこ
とによって次のようなことが懸念されます。

①目の前の生徒一人ひとりのことを考えて教育
を行う教師の専門性や創造性が奪われ、教育が
画一化する。

②業者の寡占化が進み、全国の高校生のデー
タが特定業者に集中し、その影響力が巨大化する。

③それにとまなう業者と政治・行政の癒着の可
能性。

④受験料負担や都市部と郡部の受験機会の差な
ど、格差の拡大
問題点を座視することはできません。

こうした問題を私たち高教組だけの力で解決
できるとは思っていません。問題の所在を広く
お伝えし、高校教育にいま何が求められている
かを、高校生も含めた国民全体で議論すべき時
だと感じています。

定時制の存在意義と高校入試改革

土岐剛史（道高教組定通部 部長）

高校入試改革の動き

道教委は『道立高等学校入学者選抜における改善の方向性について』をこの3月26日、通知しました。6月中を目途に「基本方針」を通知する予定となっており、各学校への意見聴取も十分にできない中で前のめりのスケジュールで行われています。

重点検討事項は3点、

- ①現在全日制などで行われている学力検査試験の配点、出題問題の観点変更の検討
- ②定時制選抜制度への学力検査の検討
- ③インフルエンザ罹患者等への対応の検討

の3点となっています。③については受験者への配慮についての検討ですが、①と②は中学校の学習指導、進路決定に強く影響を与える検討も含まれています。②については、学力試験を実施せず、書類、面接試験により実施してきた定時制高校の入試制度を根底から変更する可能性も含まれています。広範な議論と十分な検討なしに「基本方針」を決定することは、各学校の入試選抜の在り方のみならず、入学しようとする生徒・青年にとっても懸念を生じさせる可能性があります。

今回は、主に定時制課程についてふれたいと思います。

北海道の定時制高校

定時制高校は「学びの最後の砦」ともいわれ、

働きながら学ぼうとする生徒、さまざまな事情によって全日制高校には通わない生徒、もう一度学びなおしたい生徒たちが学んでいます。北海道の道立定時制高校は1981年の高校入試改革から「学力検査なし」として入試選抜が行われてきました。全国のほとんどの定時制高校が現在も学力検査を実施している中で、「学ぼうとする意志があるものは受け入れよう」という北海道の定時制教育の現在の到達点は、こうしてつくられました。また、通学困難を抱えていた青少年にとっては「学力検査」というハードルがないことは、就学先決定の重要なファクターとなっています。

現在、道内には41校の公立高校に定時制課程があります。うち、夜間は33校、昼間は6校、多部制2校（有朋、大通）、約4,000名の青年たちが学んでおり、全日制に学ぶ青年の約3%に相当します（全日制は121,000名）。道教委は道立定時制高校の配置基準について、「入学者が10名未満の場合」適正配置の対象として検討するとし、この10年間で9校の定時制課程が閉課となりました。生徒数減の中で、逆に「少人数であること」を生かして、一人一人によりそった教育、さまざまな困難を抱える生徒を支え励ます教育活動を進めています。

通知は何を変えようとしているのか

通知では、定時制の課題について、「従来の勤労青年のための教育機関としての役割だけでな

く、多様な学習ニーズにも対応する役割を果たしていることを踏まえ」とし、定時制のあらたな今日の役割について言及する一方、入学者選抜において「生徒個々の資質・能力や学習歴を

一層客観的・多面的に評価することができるようにする必要」と、生徒の「資質」や「学習歴」までをも選抜制度の評価対象にしようとしています（「1 改善の理由」参照）。

1 改善の理由

（2）定時制課程においては、これまで、個人調査書及び学習成績一覧表、面接の結果を総合的に評価して入学者を選抜してきたところであるが、従来の勤労青年のための教育機関としての役割だけでなく、多様なニーズにも対応する役割を果たしていることを踏まえ、**生徒個々の資質・能力や学習歴を一層客観的・多面的に評価することができるようにする必要がある。**

『道立高等学校入学者選抜における改善の方向性について』より引用

定時制高校の現場では、さまざまな疑念の声が上がっています。

◎入学してきた生徒の中には、小中不登校で、テストそのものがしんどく、（入試の）テストがないから定時制へ来た生徒もいる。入ってから少しずつ（定期試験への参加が）できるようになって卒業するころには自信を持つようになっていた。最初から、テストが入試項目にあるとなったら、そういう生徒はどこに行ったらいいのか。そういう子にとっては、要項をみただけで、「出願できない」学校に定時制になってしまうだろう。

◎多様なニーズというのならエレベーターの設置（車いすの使用生徒への配慮）、SSW（スクールソーシャルワーカーによる生徒の社会生活支援）、言語指導員（母語を日本語としない生徒への支援）など受け入れ体制の整備だろう。

◎そもそも定員を割っていて原則全入のなかで、何の意味があるのか。受験生徒を減らすだけだ。

◎定時制の入試のハードルを上げて、学校を運営する経費の安い通信制へ生徒を誘導しようとしているのではないか（北海道の公立通信制は、面接試験すらなく「書類選考のみ」）。



定通フェスティバルで定時制の魅力について発言する道内の定時制生徒たち(2017.11)

ある定時制高校の校長は「道教委は入試改革を進めようとしていて、中には『定時制でも学力試験を実施すべきだ』と言っているものもある。定時制の生徒の現状に全く合わないって、言っているが(聞く耳を持たない)」、またある学校の教頭は「全く何を考えているのかわからない」など、管理職からも危惧の声が出てきています。

道教委は、「今後、各地域において、学校関係者、保護者等から意見を聴取した上で、本年6月中を目途に「道立高等学校入学者選抜における改善の基本方針」を通知する予定としています。」として、稚拙なスケジュールで検討開始決定に進もうとしています。

1981年の学力検査廃止後の北海道定時制教育は、ほぼ全入という中で、「学ぼうとするものが学ぶ意思がある限り」その学びを支えてきました。高教組定通部は、そのための教育環境整備のために、夜食給食の充実、教科書給与制度の維持、などに取り組んできました。多様な学びを支えるために、教育支援員の配置(母語を日本語としない生徒の学び支援)、スクールソーシャルワーカーの配置(家庭内DV,貧困など社会的困難の中にある生徒の学び支援)などに取り組んでいます。

今後どうなるのか

かつて道教委は広く道民に開かれた委員会を設置し、議論を重ねて高校の入試制度の検討議論を進めた時期もありました。しかし、高橋道政以降は、現場へのヒアリングもほとんど行わず、教職員組合からの提言・要請に対しては、「管理運営事項である」として、話し合いすら拒否しています。一方で、昨年冬、「道民からの具体的な要望があった」として道立学校の冬季の教室温度を20度程度とするよう指示するなどの動きもありました。北海道の教育を守り育てる力は、「道民の会」をはじめとした民間教育運動のちからによる部分も大きいものです。

高校入試制度改革は北海道の教育のあり方を考える上で、道民共通の課題です。

ぜひ、みなさんの力をお貸してください。

- 1 話題にしてください。
- 2 意見を出しましょう。
- 3 定時制への学力検査導入の問題点を、さまざまな困難を抱える生徒のいる近隣中学校、フリースクールや教育支援団体、定通振興会など関係団体でも話題にし、学力検査導入の問題点を広げ、声を道教委に送りましょう。

「さっぽろ 子ども若者白書 2020」づくりが始まりました ～参加&力添えをお寄せいただけませんか～

柳 憲一（「さっぽろ 子ども若者白書 2020」編集長）

2016年4月に「さっぽろ 子ども若者白書」出現

2014年2月、「さっぽろ子ども白書」をつくろうという声上がり、9月に「『さっぽろ子ども・若者白書』をつくる会」は「子どもたちの笑顔を絶やさぬためにも、多面的な視点から子どもの実態・現状を捉え、「共有し、課題解決に向けた取り組みに発展させたい」と呼びかけて発足しました。以来、思いを紡ぎ、「子どもと家庭・福祉・医療」「子どもと学校・教育」「子どもと地域・文化・遊び・環境」「若者を支える」の4つの部会に分かれて学び・語り合い、子ども・若者と共に歩む大人たちのつながりを熟成させ、総勢130余名の方々に執筆いただき、2016年4月に刊行しました。執筆していただいた一人ひとりの向こうに、それぞれ子ども・若者、そして共に歩む大人たちの姿が見える内容となり、多くの方の手に取っていただきました。

2020年4月に

続版の刊行を

続版は3～4年後にということで「つくる会」の役員会・事務局は継続し、昨年(2018年)2月の役員会で、2020年版に向けた取り組みを開始することを決めました。以来約1年をかけて構想を語り、学び、素案をつくってきました。

3月31日、編集委員会が船出しました

役員会の呼びかけにあって25名の方が駆けつけてくれました。2時間の会議でしたが、素に対して率直な疑問や期待、内容についての意見が矢継ぎ早にたくさん出されました。

〈「さっぽろ 子ども・若者白書 2020」の構成（素案）〉

- 〈はじめに〉 総括的序論
- 〈特集1〉 「子どもの権利条例」を持つさっぽろの子ども・若者
…子ども・若者と遊び・文化・余暇・休息
- 〈特集2〉 「さっぽろの子ども・若者と家族・家庭」
 - 第1章 子ども・若者と医療・福祉
 - 第7章 子どもの権利、若者の基本的人権
 - 第2章 子ども・若者と発達・教育
 - 第3章 子ども・若者と地域・環境
 - 第4章 子ども・若者と遊び・文化・(スポーツ)・余暇
 - 第5章 札幌の若者
 - 第6章 子ども・若者とメディア
 - 第7章 子どもの権利、若者の基本的人権
- * 「小・中学生アンケート」から見える札幌の子ども・学校
 - ・ 2019年度のアンケートの結果とその分析
 - ・ 2015年度～2019年度調査までを総括して

・ 少子化を取り上げる必要があるのでは ・ 子ども自身、若者自身の声をもっと ・ 子どもの権利条例をもっと学校で活かしてほしい ・ 札幌の若い教師の声 ・ 自己責任が迫られる中で保護者の孤立が進んでいる ・ シングルファザーの生きづらさ ・ 虐待・暴力と子どもを扱おう ・ 読書・読書教育って民主主義の基盤 ・ 子ども・若者にとって余暇・遊びは捨てたものじゃない ・ 子育て・教育・福祉などに関わる行政との連携も ・ 札幌に500程もある児童ディ ・ 外国籍の子ども生きづらさ ・ 外国籍の子ども・若者から見える札幌 ……………

皆さんの参加&お力添えを

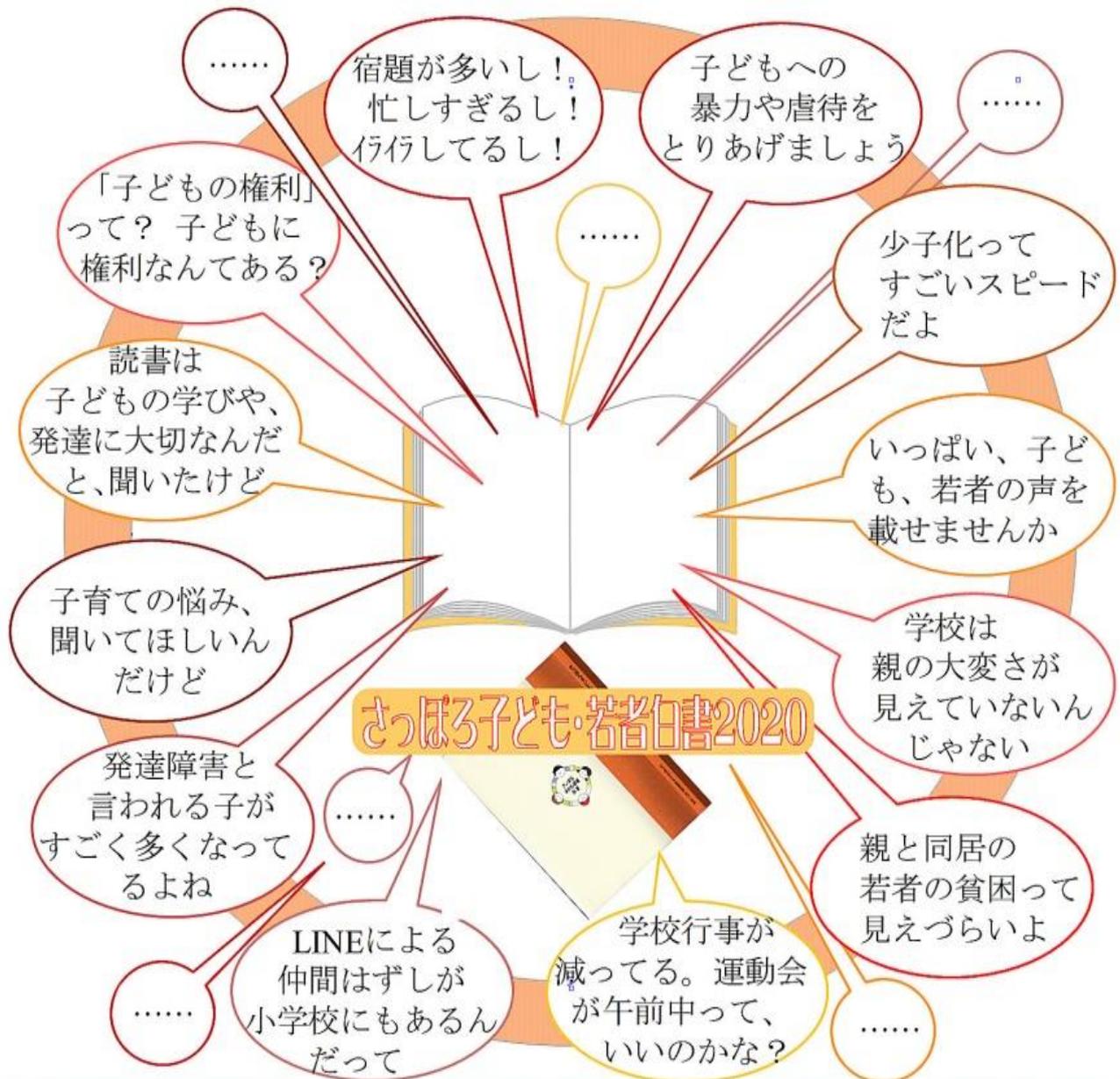
白書づくりには、関わる皆さんのあたたかい眼差しと鋭い事実認識と柔らかく緩やかな連携が必要です。合い言葉は、子ども・若者を真ん中にしたラウンド・テーブルです。

皆さんの参加をびかけると共にお力添えをお願いいたします。

一緒に

「さっぽろ子ども・若者白書2020」

をつくりませんか



2016年から4年を経る2020年春に向けて、「さっぽろ子ども・若者白書2020」をつくらうという準備が始まりました。“子どもの権利”“家族・家庭の姿”をしっかりと見つけ、子ども・若者の声をしっかりと反映した内容にすること、白書づくりに関わる団体や個人のつながりを広く・強くしていくことを大切にしようと考えています。編集委員会などへの皆さんの参加をお待ちしています。問い合わせ・連絡は、事務局の沢村までお願いします。

「さっぽろ子ども・若者白書」をつくる会 事務局（メール）：2014hakusho@gmail.com
（電話）：090-4502-2397（沢村）

「いいね」でつながる、力合わせの運動づくりを...

内藤 修司（道教組副委員長・宗谷教組副委員長）

みなさんは、スマートフォンをお持ちですか？ また、一番活用しているアプリはどんなものでしょうか。

私は日ごろから Facebook、twitter を主に活用しています。

昨年12月のことです。文部科学省は「学校における働き方改革」に関する2つのパブリックコメントを募集しました。この時、私は全教の学習資料を見ながらビールを飲みつつ「気になる！」と書き込みを試みたのです。この書き込みがきっかけとなって、Facebook と twitter を活用して運動を組織することになっていくのです。

「いいね」から「やる？」「やろうか！」へ

私は、日ごろから社会情勢など気になることや、「いま、関心があること」などを Facebook に投稿するようにしています。マスコミ報道では気づくことのできなかつた意見に出逢えたり、何より自分と同じ課題意識の方と意見を深めたりすることができるからです。この「働き方改革」も、そうでした。私と同じく全教に集う、かねてからつながりのある先生が「自分たちで学習資料を作らない？」と声をかけてくれました。それが「これからの教育を考える『きっかけ』をつくる会」のスタートです。

会として、Facebook と twitter で発信したところ、たくさんのリアクションをいただきました。「1分ちょっとでわかる・考える『働き方

改革』」の動画シリーズは延べ15000回を超える再生回数となりました。また、twitter による意見の発信を行ったところ、教職員組合運動としての運動ではつながることができないような世代・立場の方とも「教員の働き方」という共通の課題意識でつながることができました。

ちなみに、1月中旬に文部科学省が示したパブリックコメントの結果によれば、パブコメの標準的な数を上回る意見が送られたことがわかりました。私たちの活動が社会にどれだけ影響を与えることができたのかといえ、未知数なところがあります。それでも、「やらないより、やってよかった」と感じる出来事になりました。

伝統的な組合の運動づくりを補完する形で

私が所属している教職員組合「宗谷教職員組合」では、『各級段階』という言葉があります。【本部—支部—分会—本人】というそれぞれの段階を尊重していくという考え方でしょうか。もう少し言うとする、機械的だったり、情報伝達の速さの観点での限界性を持ち合わせています。

また、単組内での「各級段階」のほかに、上部組織との間にも「各級段階」があります。私が所属する宗谷教組から見れば、【宗谷教組—道教組—全教】というのが流れになるものです。

2月上旬、全教が定期大会を行いました。本来であれば、単組をベースにして運動づくりを進めている私の立場でいえば、3月上旬に行わ

れる道教組の定期大会を経て、全教が提案した議案を知ることになります。もしかしたら、個々の詳しい議案を知る機会はないのかもしれませんが。

しかし、全国の仲間と SNS でつながっていることで、「全教がこういう提案をされていてさ…」とリアルタイムで知ることができました。「私たちはこういうことを大事にしていきたいよね」と議論することで、全国津々浦々に運動を興している仲間と、刺激し合いながら高まり合うことができるのです。冒頭で紹介した「これどう思う？」から「やる？」「やろうか」と似ている動きです。

教職員組合運動の本来のやり方言えば、私は道教組の提起を待つべきなのでしょう。でも、自分の遠くで動いている社会の変化（ここでは、全教定期大会での提案）を、「各級段階」によって自分のところに情報が届くまで待っているのもできない時代なのだと感じます。それくらい、社会全体の変化も早いのです。

決して SNS が万能なのではなくて…

忘れちゃいけないのは、「SNS が便利だ」とか「運動づくりに SNS を活用すべき」ということではないのです。「一緒に運動づくりを進めるためにどんな人たちとつながるか」ということが大事なのです。

冒頭で紹介した「…きっかけをつくる会」の

取り組みは、「組合」にこだわらない方法での「運動づくり」でした。そうは言っても、大事にしたい本質は全教の学習資料から学んだり、全国で全教に集う仲間のみなさんとの力合わせによって深まりと広がりが生み出されたのは間違いありません。また、後半で紹介した全教定期大会での例は、日ごろから社会情勢や教育課題についての意識を持ち合い SNS を活用して交流し合う中で生まれる共鳴した「運動づくり」なのだと思います。

私たちの大先輩の時代、大昔から大切にされてきたように、自分の生活の範囲における力合わせで運動を進めるというのは大前提として大切にしなければなりません。しかし、新自由主義による社会の分断、政治的無関心など、自分の身の回りからの運動づくりは決して簡単なことではありません。そんな中では、全道・全国で運動づくりの思いをもって活躍しているみなさんと SNS を通してつながり合い、自分のフィールドで運動を創り合っていくことはこれからの社会において大切な視点なのではないかと思っています。

私は、今後進める運動づくりの「教訓」をたくさん見つけることができたと思っています。

「やる？」「やろうか」から即効性を持って進める運動づくりを、みなさんの身近なところから始めてみませんか？

